

平和の想いを胸に広島へ

～次世代へ伝える戦争の悲惨さ、平和の尊さ～

当市は、平成27年12月9日に「平和都市」を宣言し、平和都市実現のための事業を展開し、その一環として、平成28年度から市内の中学生代表10人を広島市に派遣しています。この事業は、裾野の将来を担う中学生たちが戦争の悲惨さや平和の尊さについて、現地で体験したことや再認識した思いを広く伝え、平和への想いを共有することを目的としています。

行政課
☎995-1807



平和の尊さを次世代につなぐ ～市内の中学生10人が広島を訪問～

7月26日(木)から28日(土)まで、平和への想いを胸に、市内5つの中学校から推薦された代表生徒10人が、広島平和記念資料館で平和学習講座を受講し、本川小学校、袋町小学校などの平和学習施設を訪れました。各施設でボランティアガイドの解説を受けながら学習し、被爆者の体験講話を聴講するなど貴重な経験をしました。

現地で感じたことや再認識した平和への想いを周囲に広く伝え、平和への想いを未来につないでいきます。



◀ ボランティアガイドの解説を受けながら、平和公園内の石碑などを巡りました。



◀ 中学2年生の時に被爆した植田さんから、当時の体験談を直接伺いました。

平和な世界のために ～今を生きる私たちにできることは～

8月7日(火)、広島市に派遣された市内の中学生10人の報告会が鈴木図書館で行われました。平和学習で見たこと、聞いたこと、感じたこと、これから自分たちにできることなど、生徒一人一人が平和に対する想いを報告しました。この報告会と同日に合わせ、同館で開催された「あいとへいわ展」に、平和についての作文を折り鶴や写真とともに展示しました。

また、参加した生徒のうち代表2人が、8月15日(水)に行われた戦没者追悼式で作文を朗読しました。



◀ 派遣事業報告会では、平和への想いを語りました。



◀ 戦没者追悼式で作文を朗読しました。

中学生派遣事業 ～平和を学ぶ～

広島市を訪れた中学生の作文を紹介します



西中学校2年生
勝又 蓮さん

✿ 平和な世界

「学校から出て目を開けた時、最初に見たものは、原形をとどめていない真っ黒なものと『痛い痛い』と叫ぶ声。そして建物が全く無くなってしまった自分の町だった。」本川小学校を見学に行った時に、案内してくれた方から聞いた被爆者の方の体験談です。僕はその悲惨な光景を頭の中で想像してみようとしたけれど、自分の家族や友達だったらと考えると怖くてできませんでした。73年前の1945年8月6日午前8時15分、広島に人類史上初の原爆が投下されました。原爆の表面温度は7,700度、太陽が6,000度なので、まるで小さな太陽が降ってくるようなものです。たったピンポン玉くらいのウランで、一瞬にして七万人もの命が失われました。

僕たちは、当時中学2年生だった被爆者の方のお話も聞きました。無傷の人は、防空壕に入らず、何も無い所で野宿したこと。妹が、亡くなったのか生きているのかさえ分からないこと。キャラメル一つがごちそうで、非常食はみんなで分け合って食べていたこと。今の僕達と同じ歳で、僕の日常では考えられないような経験をしていました。僕は、自分のお小遣いでキャラメルが買える。家に帰ると家族がいる。とても幸せなことだと思いました。だんだん被爆者の方々のお話を聞ける機会が減っています。それでも被爆者の方々は、できるだけ長く、できるだけ多く、「平和」という言葉について世界中で語ってくれています。こういう方々がいるからこそ、少しずつでも平和に近づいているということ、世界中の人々に気付いてほしいです。

現在、15,955発もの核が存在しています。なくしたいのに、なくならない。一人一人の願いが集団になって、国家へ。そして核のない世界になるように僕たちは、日本で起きた悲劇を忘れることなく語り継がなくてはいけないと思います。問題が起きたら、話し合いで解決できるような世界になったらいいな。笑えること、何も怯えずに生きていられること、そんな幸せを感じられる平和な日々を過ごしていけるように。



西中学校2年生
外川 花さん

✿ 普通の生活

「ぼく、戦争せんよ。」

幼い男の子が言ったこの言葉は私の心にとっても響きました。

一見普通なこの言葉ですが、戦争してはいけないと思えない子供は、この世界にたくさんいるのです。昔の日本も同じでした。戦争してはいけないという教育は受けず、国のために、勝利のために、をいつも考え、生活していたのです。そのため、負けることは恥ずかしいことだったのです。

そんな中、広島と長崎に投下された原子爆弾。その下では、多くの人々が「生活」をしていました。いつも通りの生活をしていながら落とされた原爆で、何十万人もの命と生活がうばわれたのです。

この出来事があった日本では、「戦争はしてはいけないこと」ということが広まったのです。この原爆の被害の大きさは日本以外にも広まり、「原爆を使ってはいけない」ということが伝わっていきました。

それでもこの世界から核兵器はなくなりません。今でもボタン一つで大きな被害を出す核が、約15,000個あるのです。このような現状をとっても不思議に思います。

あの日の恐怖を覚えていないのでしょうか？知っているのになぜなくなるのでしょうか？この核をなくそうとするための条約があります。「核兵器禁止条約」です。この条約に賛成している国はたったの122ヶ国だけなのです。

この条約に日本は賛成していません。どうしてなのか、私なりに考えたことは、「日本が賛成してしまうと、核兵器を持たない国のみが賛成し、核兵器を持つ国は反対のまま、何も変わらなくなってしまうという考え」があるのではないかとことです。

だからまず、日本国民が核への反対意識を持ち、世界へ発信していくことが大切だと思いました。

そのために事実を知ること、判断力をつけることが大切です。

中学生派遣事業 ～平和を学ぶ～



東中学校2年生
吉川 優音さん

✿ 私にできること

今回の研修で特に印象に残っていることが、二つあります。一つ目は、被爆された方の話です。話をしてくださった方は、元気に見えましたが原爆の影響で障がいが残っているそうです。助かった後も、さまざまな障害を引き起こして人々を苦しませ続ける、残酷で恐ろしい兵器であることを改めて分かりました。

二つ目は、本川小学校の女の子なつこさんの話です。なつこさんは、学校の地下にいました。原爆が投下されたとき、大きな音が聞こえたので外へ出て見ると、そこには全身をやけどした人が一人立っていました。顔がただれていて誰だか分かりませんでした。後に親友のあきこさんだと知って、とても驚いたそうです。体が熱かったので、二人は一日中近くの川に入っていました。次の日に救助が来て、二人は再会を約束して別れました。しかし、あきこさんは一週間後に亡くなったそうです。なつこさんは、なんで私だけ生き残ったのかと悩み続け、死を望んだこともありました。しかし、なつこさんは生き残ったからこそ、原爆の真実を伝えなくてはと決意し、昨年亡くなるまで活動をされました。私は、思い出したくもない出来事を後世に伝えたなつこさんの心の強さに、感銘を受けました。

広島研修を終えて思ったことは、二つあります。一つ目は、この出来事を絶対に忘れないことです。この出来事を人々が忘れてしまった時、再び同じ過ちが起きると思います。私は、なつこさんのように被爆者でもなく、立派な講演会もすることはできませんが、私自身が忘れないで、家族や学校の仲間に伝えていくことはできます。

もう一つ目は、自分と周りの人の命を大切に生活することです。命を大切にするとは、どういうことか私なりに考えました。それは、自分も周りの人も傷つけない言葉を使っていくことです。小さなことではありますが、私にできることを精一杯行うことで、この研修で学んだことを活かしていきたいと思います。



東中学校2年生
八田 怜央菜さん

✿ 平和の灯が消える日

「平和」とは何か。戦争や争いがない状態、そして、心穏やかな状態です。それは漠然としていて、広島へ行く前の私には、まだ平和についてははっきりとは分かりませんでした。

私は、今回初めて広島を訪れました。被爆した建物やいろいろな展示を見学し、戦争の悲しさや残酷さを目の当たりにしました。原爆が落とされる前の原爆ドームを写真で見ると、当時としてはモダンな建物だったのに、実際見てみると、無惨に鉄骨が曲がり、外壁は焼け焦げ、私の想像をはるかに超えていて、とても衝撃を受けました。

私がいちばん心に残っているのは、ガイドさん達のお話です。どのガイドさんもおっしゃっていたのは、普通の、今あるこの生活が当たり前ではないということです。だから、こうやって生活できていることは幸せであり、感謝していかなくてはならないのだと思いました。

あの日、広島に落とされた核爆弾は、人間が作り出したものです。同じ人間なのに、その核で沢山の人の命が無くなってしまったことは、とても悲しいと思います。しかし、世界にはまだそんな恐ろしい核が残っています。その核がすべて無くなると、広島にある「平和の灯」という火が消えます。核兵器の無い世界にすることは、簡単なことではありません。実際にその灯は、今もまだ燃え続けています。

平和の灯が消える日は、いつ来るのでしょうか。その灯を消すために、私たちに何ができるのでしょうか。

核がなくなるには、私たち世代が、原爆の恐ろしさを訴え続けることが大切だと思います。広島・長崎だけの問題として、私たちはとらえがちです。そのことを継承していくことはもちろん、同じ過ちを繰り返さないよう、思いやりあふれる社会を創造していくことで、世界を変えていく必要があると思います。私ができることは、とても小さいことですが、多くの人がやっていけば、きっと核はなくなるはずで。平和の灯が消えることを信じて…。

広島市を訪れた中学生の作文を紹介します



深良中学校 2年生
小島 諒也さん

✿ 広島での学び

広島駅から原爆ドームへ向かう風景は、広い道路・大きな建物・大勢の人・緑豊かな公園がありました。73年前の1945年8月6日午前8時15分、今僕が見ている雲一つない空のもと、たった一つの原子爆弾が広島に投下されました。一瞬にして約5万人の尊い命が奪われ、焼け野原になってしまったということが、イメージがつかない程のきれいな街並みです。

平和記念資料館では、原爆が投下される直前と直後の写真がありました。強烈な熱線によって黒こげになってしまった街並。僕は写真を見て思わず息を飲み、しばらくその光景から目が離せませんでした。袋町小学校では、焼け残った壁を利用し、人々はわずかなチョークを見つけて、家族の安否を尋ねる伝言板にしていました。その伝言板を見て、大切な家族や友人の生存を信じ、必死に探す様子、被爆直後の緊迫した様子が伝わると同時に、とても切なくやりきれない気持ちになりました。

一番印象に残ったことは、被爆を受けた植田さんの話でした。妹を生きっていると信じ、必死になって焼け野原を探し歩いたこと、今にも息絶えそうな人達から「水をくれ！」と言われたが、「水をあげたら死んでしまうよ」と言われ、あげられなかった話を聞きました。助けたいのに助けてあげられない無力さや哀しみは、僕の想像を絶するもので、胸が苦しくなりました。原爆そして戦争の悲惨さを改めて感じ、二度とこのようなことはくり返されてはいけなく強く感じました。僕達のために、当時の話をしてくれた植田さんの想いをしっかり受け止め、語り継いでいくことが、僕の使命だと感じています。

今の広島があるのは、平和を切に願い復興のために努力をおしまず生きてきた人達がいるからこそです。これから僕にできることは、原爆の脅威、戦争の悲惨さと恐ろしさを真っすぐありのまま家族や友人、地域の人々そして未来の人々へ伝え、風化させることのないよう努力していくことです。自分にできることを積み重ね、いつもの日常の生活に感謝し、平和について常に考え行動していきたいと思えます。



深良中学校 2年生
才木 心水さん

✿ 近道できない平和

大切な人も生活も街も、すべてが失われたあの日。人間が人間の自由を奪ったあの日。それは、広島に原爆が投下された1945年8月6日です。みなさんは、この日の、この出来事についてどのような思いを持っているのでしょうか。今までの私は、お化けのようにふらふらと近づいてくる真っ黒に焼けた人間らしきものや、辺りが静まりかえった暗い景色を、想像するだけで息が詰まり、目を背けてしまっていました。しかし、広島で8月6日になにがあったのか知るにつれて、目を背けたままではいけないと気づきました。思い出ただけでも心が苦しくて、悲惨な過去の出来事を声に出したくない人も、私たちが担う未来の平和のために、事実を伝えていくことから逃げてしまっただけではいけないんだということを知りました。逃げるのではなく、向き合うことが、平和につながる答えだと思います。

現在、地球上には核兵器が約15,000個も存在しています。その数は、地球を何度も消滅させることができるほどの数です。そんな核兵器を一日でも早くこの世界から無くすには、私たちのこれからの行動が鍵となっています。その行動のうち、私がこれから特に力を入れたいことは、生き物を大切にすることです。広島記念館で見たものの中に、「国にとって父は何十万人の内の一人居ると思いますが、私達にとって父は、全てだったのです。」という言葉がありました。きっと、戦争でお父さんを亡くされた方が、かけがえのない父のことを想って残した言葉だと思います。これだけ多くの人々が地球に生きていても、同じ人は、一人もいません。亡くなった人の代わりになれる人など、誰もいないんだということ、この言葉から深く感じました。

だから、被爆して夢を叶えることができなかった人のためにも、動物や植物のように、今まで命をつないできたものを、簡単に途絶えさせないように、傷つけないように、地球に優しい生き方をしたいです。

広島のために、日本のために、世界のために、近道はないけれど、出来ることから一歩ずつ、平和に向かって進みましょう。

中学生派遣事業 ～平和を学ぶ～



富岡中学校2年生
岡村 亮哉さん

✿ 平和な社会になるまで

「助けてあげられなくて、ごめんなさい。」
がれきにはさまり、助けを呼ぶ声を聞きながら、火の手から必死に逃げなければならなかった人たちの心の叫びが感じられました。

1945年8月6日、月曜日の午前8時15分。学校や仕事に向かう人たちを、一発の原爆が襲いました。激しい閃光とともに爆風が吹き荒れ、広島街は一瞬にしてさら地になりました。写真の中の被爆した人たちは、皮膚が焼けただれ、真っ赤にはれ上がっています。割れたガラス片が体じゅうに刺さっている人や、眼球がとび出ている人、全身が黒くこげ、誰なのか分からなくなってしまっている人もいました。朝までいつも通り生活していた人たちが突然死んでしまうなんて、誰が予想できたことでしょうか。

この悲惨な事件は、第二次世界大戦の最中に起こりました。長びく戦争を終結させる手段としてアメリカが選んだのは、原爆を広島に落とすことでした。戦争は終結しましたが、そのために失われた命はあまりにも多すぎると思います。

このような兵器は、二度と使ってはいけない。そう考える国民の思いとは裏腹に、世界にはまだ約15,000発もの核兵器があります。これでは、たとえ戦争がなくなっても平和な世の中になったとは言えません。

広島平和記念公園を設計した丹下健三さんは、「平和は訪れて来るものではない。人々が実践的に創り出してゆくものである。」という言葉を残しています。

たしかに一人では、平和な社会を創ることができません。しかし、多くの人々が世界の平和を目指して行動すれば、いつかは争いや核兵器もなくなります。僕たち一人ひとりの力はとても小さいです。それでも、多くの人々が集まればどんなことでも成しとげることができるはずですよ。

自分にできることをはじめ、人と人とのつながりを大切にし、思いやりを持つこと。それが平和な社会につながることはないでしょうか。

多くの願いが集まり、世界が平和になることを、僕は心から願っています。



富岡中学校2年生
藤田 祐那さん

✿ 0.2秒

皆さんは生きています。生きていた時間や生き方が異なっても、今、この瞬間を自分なりに生きています。そう思うと、ほんの一瞬の間も、とても大切な時間ですよ。たとえ、0.2秒しかなかったとしても。

1945年8月6日、午前8時15分。焼けるような暑さを感じるその日は、みごとな快晴だったといいます。家で朝ご飯を食べたり、学校へ登校したりと、そのときも、それぞれが生きていました。しかし、何気ないその光景も、0.2秒後に幕を閉じます。その一瞬に、広島市の上空には、小さな太陽が生まれました。

その太陽は、人を飲みこみました。平和の二文字も、消えました。なぜでしょう。ただ、朝ご飯を食べてただけなのに。友人に、「おはよう」と言おうとしていただけなのに。

私は最初に、「皆さんは生きています」と言いました。皆、まばたきをしています。呼吸をしています。しかし、当たり前だなんて思わないで下さい。あの日も、人々は当たり前のように生活をしていました。ですが、原爆が爆発して、0.2秒後にできた直径400メートルの太陽は、その当たり前を奪いました。

皆さんは、今隣にいる人と、仲が良いですか？壁をつくっていませんか？もし、壁をつくらない仲間の輪が世界に広がったら、いや、広がっていたら、無数の尊い命が奪われることはなかったでしょう。

ある人は、言いました。「平和は訪れるものではない」。行動をおこさなければ、何も始まりません。ですが、あなたが、隣の人と仲良くすれば、世界の平和に、一歩ずつ近づいていくのです。

今なお消えない、核爆弾。ボタン一つで発射できるものは、現在4,150発もあります。たった2発で、広島と長崎の平和は消えました。0.2秒で、当たり前が、当たり前ではなくなりました。

ここで、皆さんに問います。あなたにとっての幸福とは。あなたにとって、平和とは、なんですか。

広島市を訪れた中学生の作文を紹介します



須山中学校 2年生

内田 遥太さん

✿ 戦争・核兵器のない
平和な世界を目指して

今から73年前、1945年8月6日午前8時15分、大勢の人々がいつもどおりに暮らしている広島に、原爆が投下されました。今の僕たちと同じ、13、4才の方々の命が、たくさん失われたそうです。夢や希望を一瞬でうばってしまった原爆が、どういうものか。実際に見聞きしてきたことで、僕の心は大いにゆさぶられました。被爆した人は、熱線により約3,000度の熱を浴びて皮膚が溶けていました。他にも目を失った人が、れきの下じきになり動けなくなった人、大量の放射線を浴びた人もいました。原爆は、何の罪もない大勢の人を巻き込み、一瞬のうちにその命を奪っていきましました。これは、決して許されることではないと思います。

資料館に展示してあったのは、驚くものばかりでした。全身に火傷を負いながらも、赤ちゃんを抱きかかえ必死に守っている人。水を求めて川や貯水槽に飛びこみ、そのまま亡くなった人。爆発を直に受け、訳も分からずに亡くなった人。これらに共通しているのは、みんな被害者ということです。被爆した人のほとんどは、いつもどおりに生活をしていました。誰一人として、あの日に原爆が落ちるなんて思ってもいなかったはずです。

戦争とは、たくさんの人が死んでたくさんの人が悲しむものです。戦争、核兵器をなくすためには、どうすればよいのでしょうか。僕は、多くの人に戦争をして何が起こったかなどを知ってもらうことが大切だと思います。事実を知ってもらうことで、核への意識が高まり、核をなくすきっかけになると思います。平和とは、みんなで作りあげていくものだと思います。平和とは、個人の意識の集まりです。

原爆や戦争についての事実を共有し、伝え合い、どうしたら戦争や原爆をなくしていけるかを、話し合うことが必要だと思います。



須山中学校 2年生

宮崎 真衣さん

✿ 世界で唯一の被爆国

昭和20年8月6日月曜日、午前8時15分。一週間の始まりの日、数十万人が暮らす広島は、とてもいい天気でした。

しかし、「広島は快晴なり」という一つの知らせから、広島景色は一変します。アメリカ軍は、その「快晴なり」の知らせを受け、広島への原爆投下を決めたのです。現在もある、T字型の橋・相生橋を目標にして、原爆が落とされました。目標としていた相生橋から少し離れた所にある、島病院。そこが、爆心地です。一瞬にして、多くの命をうばった原爆。中学2年生で被爆された植田さん。朝礼をしているとき、オレンジ色に光ったかと思うと、何も音が聞こえなくなりました。とっさに耳と目を守って伏せました。少しして、学校の先生と、無事だった八十数名のクラスメイトと共に、山を目指して逃げました。逃げるときは、怖いというより、はぐれないように、という緊張が大きかったといいます。植田さんは、「戦争でいちばん怖いのは、人間が人間でなくなること。大けがをした人や、目玉が飛び出ている人、皮膚がたれ下がっている人を見ても、なんとも思わなかった。」ともおっしゃいました。健康な心であれば、そんな状態の人を見れば、怖いと思うのが普通です。ですが、戦争でこわれてしまった心は、何とも思わないのだそうです。

戦争は、絶対にしてはいけないことです。戦争をしても、良いことなんて一つもありません。今でも毎日のように起こってしまっている戦争。それをなくすためには、私たち一人一人の気持ちが大事です。私たち一人一人が、「私たちは戦争をしません」と、かたく心に誓って、世界中の人々がその気持ちを持てば、きっと戦争はなくなると、私は信じています。

私たちの住む日本は、世界で唯一の被爆国です。日本がこの先もずっと、唯一の被爆国であるように、皆で力を合わせていきたいです。